

行為がもつ道具的關係と一応の理由

中谷内悠 (Nakayachi Yu)

九州大学大学院

意図的行為を理解するためには、その行為が行為者にとってどのような意味をもつのかということが重要となる。そしてその中でも、行為者のもつ目的に対して行為がどのような道具的關係にあるのかということが行為理解にとって特に重要となる。実践的推論はこの道具的關係を示すものとなっており、それゆえ実践的推論の推論形式を明らかにすることは、ありうる道具的關係について明らかにすることになる。

道具的關係について考察するにあたって、近年では、意図や意図内容に関する推論についての議論が中心的に論じられている。しかし、意図や意図内容に関する推論は、目的と行為の間に成り立つ道具的關係を十分に示すものではないと発表者は考える。というのも、これらの推論を示すだけでは、成立する道具的關係について、明確化されるべき曖昧性が残ってしまうからである。目的と行為の道具的關係を十分に示すのは、意図や意図内容に関する推論ではなく、むしろ一応の理由 (prima facie reason) に関する道具的な推論だと考えられる。

本発表では、実践的推論に関するデイヴィドソンの考えをもとに、一応の理由に関する道具的な推論の説明を与えることを目的とする。デイヴィドソンは、ヘンペルが与えた「帰納的・統計的説明」についての分析をもとに、帰納的・統計的説明との類推によって理由に関する推論の説明を行う。そこでは、(1)「一応の理由」を「切り離されない関係 (non-detaching relation)」として分析し、そのうえで(2)一応の理由に関する道具的な推論が演繹的な推論だといわれる。しかし実際にデイヴィドソンが示したものは演繹的な推論ではなく、またいかなる意味で推論と呼べるのかも明らかではなく、彼の考察は修正を必要とするように思われる。ただし、(1)、(2)の考え自体が誤っているというよりも、(1)と(2)を示すことに彼が失敗したと発表者は考える。そこで、まずはヘンペルの考えを整理し、帰納的・統計的説明と理由に関する推論の間にどういった類推が成立するかという点を再検討する。そのうえでデイヴィドソンが想定した(1)、(2)の考えを実際に示すことで、一応の理由に関する道具的な推論について適切な説明を与えることを目指す。